



■主な内容

- ・ 名誉会長 中原暢子惜別の辞
- ・ UIFA JAPON 第16回通常総会 報告
- ・ 第44回海外交流の会のお知らせ
- ・ 総会記念講演 鈴木博之先生「保存と創造—アンコール遺跡群から—」
- ・ 本郷キャンパス見学に参加して
- ・ 産業としての観光— 遠い国と近い国で考える —
- ・ 魅力的なりノーション／第1回
- ・ 新へんなかフェオープン
- ・ UIFA JAPON ASFA 組始動



在りし日の中原暢子名誉会長（左から一番目）
1998年UIFA日本大会ポストコンgresツアーで訪ねた神戸の酒倉で（写真提供 松川純子）

UIFA JAPON 名誉会長(前会長) 中原暢子惜別の辞

UIFA JAPON 会長 小川信子

7月6日新潟の建築士会の会から帰宅。中原暢子さんの訃報のFAXが入っていた。突然のお知らせに一瞬、呆然としてしまった。久しくご無沙汰していたので気にかかっていた矢先でもある。



中原さんとの交流は、大学を卒業し、女性の建築及びデザインの仕事に関わる人々の集まり「PODOKO」を立ち上げた時以来で、およそ半世紀にわたる。文字通り、走馬灯のようにさまざまな場面がよぎった。その中でも、林・山田・中原設計同人を創設して間もない1963年にUIFAの第1回国際会議に出席されたことが思い起こされる。それは、今のUIFA JAPON 発足の原点になっているからである。海外旅行が限られていた時代、ド・ラ・トゥール会長からの招請で、PODOKOから代表して出席していただくことにした。その折、草野千恵子さんもご同行なされた。会議の後、9ヶ月間建築事務所で学ぶ機会を得て帰国された。ヨーロッパを中心とした女性建築家の動向とフランスの建築についてはじめてうかがうことができた。ル・コルビジェの近代建築に興味を持っていた時代である。新しい風を送られPODOKOの活動も活発になったように記憶している。その後、UIFAの国際会議のたびに個人参加して日本代表として中原さんが交流を深めてこられた。そしてUIFA JAPONを1992年に創設し、中原さんが初代会長を務められ、1998年のUIFA日本大会を開催することができた。

わが国、女性建築家の戦後世代のトップを走り国際的な連携の要となられた功績は計り知れない。ここに心より哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

UIFA JAPON 第16回通常総会報告

去る2008年6月21日(土)13時から、東京大学本郷キャンパス工学部1号館第15教室でUIFA JAPONの第16回総会が開催された。出席者36名、委任状提出25名で会員90名の過半数をもって総会は成立した。

松川副会長の開会宣言に続いて小川会長から挨拶があり、UIFA JAPONが16年間続いてきたことは会員の協力があったからこそであり、その蓄積の上に最近では若い世代の活躍やその活動成果があがってきているので、更なる会員の参加と協力をお願いしたいと話された。ついで、議長に小川会長を選出し、議事録作成を安武敦子、議事録署名人を谷村留都、板東みさ子を指名、議事に入った。

第1号議案は、2007年度の活動報告、収支報告及び監査報告だった。それぞれ山田規矩子理事、森田美紀会計、栗山楊子監事によって行われ、承認された。

第2号議案は、役員改選についてで、新役員候補の紹介があり、原案通り可決された。また、役員会の組織と任務分担についても報告され、承認された。新役員のメンバーについては、既に総会議事録が会員の皆様には送られているので、そちらをご参照願いたい。退任した役員は、飯田とわ、石川和代、石川弥栄子、谷村留都、東由美子、渡邊喜代美の6名。

第3号議案は、2008年度活動予定及び予算案の審議で、事業予定を吉田洋子理事、予算案を森田美紀会計が提案し、承認された。その後、中越地震を契機に生まれ着実な成果を上げつつある「災害復興見守りチーム」及び、今年度から発足する、公立学校のトイレをアートの力で快適な空間にしようという「UIFA JAPON ASFA組」2つの自主活動グループがそれぞれ今後の活動予定等をスピーチし、会員の理解と協力、参加を求め、承認された。全ての議事を終え13時45分に総会は閉会した。

なお、総会では四川大地震被災地支援の募金を行い、事務局からCODE(海外災害援助市民センター)に送られた。さらに、会場のハワイエで売られていた見守りチームの成果品である新潟・法末集落の絵葉書の売上は、総会直前に起きた岩手・宮城内陸地震の支援のために使われることになっている。ハワイエは、総会の前後には見守りチームの報告書、会員が関わって出版された書籍等を買求める人達で賑わっていた。(石川和代)

第44回海外交流の会のお知らせ

“象徴の構築とサスティナビリティ”オリンピック都市、北京&ロンドンから学ぶこと

■ 講師：建築家・白井宏昌

■ 日時：2008年9月6日(土) 14:00～16:30 (開場13:30)

■ 場所：新日鉄代々木倶楽部 2階中研修室(階段のみの昇降)
〒151-0053 渋谷区代々木3-59-9 TEL 03-3370-3141

■ 参加費：会員/1000円 非会員/1500円 学生/500円

■ 申し込み方法：UIFA JAPON 事務局まで

FAX: 03-5275-7866 E-mail: uifa@LIQL.co.jp

2008年 UIFA 総会記念講演 東京大学教授鈴木博之先生
「保存と創造—アンコール遺跡群から—」

吉田 あこ

曙に映えるアンコールワットのシルエットの見事さは息を飲むばかり。この東洋の世界遺産を一体どのように残すか、1898年設立のインドネシア・印度・中国・フランス・カンボジア・日本の国際チームの一員として鈴木博之先生が臨まれました。

先生は東大を1968年卒業後、東大助教授、教授と進まれ、英国留学、ハーバード大学客員教授など、世界的に御研究を深められ、その御業績で、建築学会賞(論文)、芸術選奨文部大臣新人賞、サントリー学芸賞等と学問・文芸と幅広く、一般人にわかりやすい文体で濃い内容を表現される方です。この先生をお迎えして、「世紀の発見」とされたアジアの遺跡保存のお話を総会の記念講演として伺いました。



巨木の絡むタプロム遺跡

(写真提供 鈴木博之)

■ 保存そして創造とは何か

遺跡保存とは一体何を残すのか！と先生は問いかけられる。遺跡を修復して整備するという行為は、遺跡の造られた時代を今に復活させることなのか？それでは、千年間に絡みついた樹木を伐採し、崩れた岩をもどして組み直す、そのことだけなのか・・・先生は沈思黙考。

さて、アンコール遺跡と言えば、カンボジア、そこは地雷の代名詞のような悲しい地。今もなおこの遺跡周辺の森林には「地雷注意」のドクロ印の看板が目立つ。

この遺跡発見は19世紀で、樹海の中からフランス人が発見した。このアンコールワットやアンコールトム遺跡は千年前に栄えたクメール帝国の王都の中核で、この王朝はインドシナ半島中央部にアンコール王朝として君臨し、時代でいえば、日本では平安・室町にあたる。発見当時はギリシャ・ローマの遺跡以上の「世紀の大発見」と騒がれたが、近年の内戦で戦場化していた。最近やっと学術研究も進み、広大なこの王都は神々が降臨し「五穀豊穡」を約束された地という全容が解りかけた。

「物も人もその一瞬一瞬をどめおくことは出来ない。その造られた時から既に崩壊の過程を辿って行くのである。」この厳然とした哲理の前に、先生は保存とは「時間と自然との微妙なバランスの中に安定を与える作業だ」と表現された。



タイ国境のプレア・ビヘアの遺跡

■ 都市遺跡としての保存と発展

御講演で極めて印象的でしたのは、この遺跡群を先ず鳥瞰図で示され、広大な王都としての機能配置を説明されたことでした。寺院・宮殿そして生産手段の灌漑装置の城壁・当時の王都の繁栄ぶりは世界でも最高水準の数々の技術が

産業としての観光—遠い国と近い国で考える—

北本 美江子

■ ポストモダンの産業

建築の世界でポストモダンといえれば80年代の流行だから、もはや過去のものと思われており、哲学、文学における論争はもっと古い時期だ。モダニズム(近代主義)の後にくる、新しい考え方や形を求めたが、現実の社会の歩みはもっと緩やかだった。今頃、欧米から地球規模に広がった近代化の本質に、民主化が含まれるかなどが議論され、むしろモダニズム自体を見直しているように思える。

大雑把に近代化を中産階級が豊かになることと考えると、欧米や日本が大量生産、大量消費によって近代化を成し遂げた後、化石燃料や資源の有限性に気づいてからも、逆戻りできずに製造業には高付加価値を求め、さらにモノから心へサービス、時間、エンターテイメントなど欲求は限りない。グローバル化の進展で、遅れて経済発展を追う国々も同様にせざるを得ず、観光も煙突のない工場によってポストモダン産業に仲間入りすることになる。

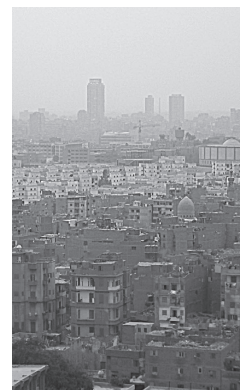
観光を産業とするのは、自然や文化資源を見物に集まる人々に交通、宿泊、食事などサービスを組織化し、案内書等の作成やおみやげなどに地場産業製品を販売することで、雇用創出の場となることから、第三次産業に分類される。観光

資源があることが前提だが、修復、整備して、イベントを企画するのも、産業規模拡大に貢献する。

最近、私は2回、海外に出る機会があり、2月にエジプトへ観光客として、5月には韓国ソウルへ、都市に関する国際シンポジウム参加も目的として訪れた。フライト時間が20時間と2時間の遠い国と近い国で、産業としての観光に対する取り組みの違いを感じた。以下に述べてみたい。

■ 遠い国、エジプトで

四大文明の一つという、人が地球に残した最古の文明の痕跡は、そのスケールの大きさも、石が現に示している時間の長さも圧倒的で、7世紀以後に支配的となったイスラム教の偶像破壊による石像の欠けた鼻も、時間の経過を表わしていた。その物理的な存在感の大きさは、むしろ観光を産業として振興させる余地もなかったのかもしれない。ナイル川中流のルクソール神殿や王家の谷など、観光というよりは学問的に考古学の対象であつたらう。



カイロ旧市内の街並み
(イスラム寺院から)

背景で、五穀豊穡のために、この地の乾季の水不足と雨期の洪水を制御する巨大な装置を城壁に仕込み、平地の優れた水利灌漑網と一体にさせ、しかも、その外壕を東西の大貯水池へと繋いで、河川と雨水両用を調節しながら、年に2回も米を採つたのです。これが、当時の覇者モンゴルの使節団を驚かせた「水の都」の本質でした。

この目を見張るばかりの王都の都市計画を遺跡保存するにはどうしたらよいか・・・そしてその保存遺跡は現代の人々に何をもたらすのか・・・この問いに答えるように、現在では、ベトナムはこの遺跡を「最大の国家資源」として、保存計画を進めています。つまり矛盾するような言葉ですが「発展する遺跡」として活用保全を進めているのです。「過去と現代の微妙なバランスに安定を見いだした」と結ばれた。

■ 懇親会は謝恩会にも似て

ご講演の後、東大構内の新旧建物の見学を行い、保存と発展を味わった。かの戦時中の出会いと別れを秘めた三四郎池。岸田日出刀の統一デザイン建築群、そして、芦原・岡田・槇・安藤 諸先生方の個性的建築の数々。

つづく懇親会では先生を中央に囲んで、46人が晩餐会形式で着席し、熱烈歓迎は堰を切ったように、質問とサイン攻め、先生との写真撮影となった。印象的な自己紹介では、「先生のご著書を読みました、今日も新幹線の中で読みました。出来ればサイン頂きたい」と遠路の方。また、「子供を預けて4年間先生のお講義を聴講した。もう至福の時でした。」など。子育て中もなお、知に飢え乾く女性の有りようを如実に示した言葉。UIFAならではの謝恩会雰囲気となった。やがてファンファーレのうちに先生はやや恥ずかしげにご退席された。先生は今年御退官とか。日本建築界・世界建築界・そして女性建築家のためにも今後とも御活躍を祈るばかりでした。



先生を囲んで

ギザのピラミッドは、ナイル川をはさんでカイロ市の対岸がギザ市なので、大カイロの郊外といえる位置にある。ピラミッドの石はナイル川の洪水時に船で運んだと言われる程度の距離だ。訪れる大勢の観光客相手に仕事をしたい人たちが勝手に住みついてしまうことを避けるため、一定地域の住宅等の建設は規制されているとのことだった。その意味で観光が重要な産業ではあるのだろう。

ナイル川上流のアスワンハイダムは下流の農業を安定させたが、貴重な遺跡であるアブ・シンベル宮殿はその人工湖に沈む危機に瀕し、ユネスコの国際キャンペーンによって基金を募り60m上に移動した。エジプトは歴史と厚い富裕層の重圧で、貧困層が中間所得階層へレベルアップする産業振興が図りにくいかもしれない。観光旅行で都市計画的な予備知識を持たず、その時間もとれなかったため、街並みから格差の構造を読み解けなかったのは残念だった。

■ 近い国、韓国ソウルで

一方の韓国は朝鮮戦争後の戦時体制から、80年代に民主化運動が盛んになり、88年のソウルオリンピックの少し前に直接選挙による大統領が誕生して現在に至っており、自ら勝ち取った民主化の意識が強いように見えた。日本とは東アジアの米文化を共有し、儒教が社会の基本となってきたとこ

本郷キャンパス見学に参加して

— 100年余りの時代の流れを感じる —

御船 杏里

東京大学本郷キャンパスは、南北に伸びる本郷通りに沿って、間口約1.2km、奥行き約300mから700m、旧加賀藩の江戸屋敷跡を含む、約17万坪の広大な土地だ。80棟を超える建物群をつなぐ、縦横に樹木が植えられた道を1時間余り、参加者20人程で自由散策した。大正時代に建てられた化学東館から最新の福武ホールまで、大正から昭和、平成と100年あまりの時代を駆け抜けた気分だ。元気な声とともに活動の様子が建物から緑へ溢れ出てきて大学らしい雰囲気、梅雨の中休み・穏やかな曇りであった。外観を踏襲した建物群から外壁保存し内部をリノベーションした建物から新しい分子を投入した新築建物まで、さまざま。三四郎池のように変わらずキャンパスを見つめてきたものも。統一感から個性へ、アイデンティティの確認へと、時代の流れを感じる。また大学のための大学から、開かれた大学へと変革しつつある。それぞれの時代に未来図はつくられ、今後も何段階かにわけて未来図が創られていくのであろう。(写真提供 板東みさ子)



人力車車庫をリノベーションしたインフォメーションセンターと建物高さを抑え、緑の中に沈められた地下2層の福武ホール

ろも似ている。都市計画の面ではソウル市はグリーンベルトを守り、周囲の山肌の緑を残すことができたのは、規制が実効性をもつ権力の強さだけでなく、風水の思想を取り入れた影響とも聞いた。

韓国の政治状況は複雑らしいが、ソウル市長として手腕を評価された李明博現大統領は、市長時代に清溪川の上を通っていた高速道路を壊して、川辺を散歩できる流れを回復した実績で有名である。韓国では4割くらいの人口が大ソウルへ集中しており、その潤沢な財政事情に支えられた自前の都市計画シンクタンクの提言に基づいていたが、その意思決定には観光産業への方向性があったに違いない。

18世紀末に遷都計画があったソウル郊外の世界遺産、水原市の華城も、城壁などよく観光資源として修復されており、ソウル市内の歴史遺産も公共事業的予算配分がされているという印象を受けた。日本の旧総督府庁舎を解体して修復した景福宮では、光化門はまだ工事中だったが、内部では王朝時代の衣装をつけた衛兵交代式が行われ、産業としての観光促進に政策的意思が感じられた。



ソウル市の山並みを残した景観(市庁舎近くのホテルから)

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町2-5-4

第2押田ビル ㈱生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

発行 2008年8月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083

PHONE :+81-3-5275-7861

FAX :+81-3-5275-7866

■ 魅力的なりノベーション／第1回

明倫小学校⇒京都芸術センター

地域の力と豊かな空間が活かされたりノベーション

在塚 礼子

明治2年、学校制度が始まる3年前、京都に日本で最初の学区制の小学校が誕生した。行政区を兼ねた学区ごとに、住民が資力を注いで建てた小学校は、集会所、保健所などの役割も担う地域の中心的存在だった。呉服問屋の大きな町家が立ち並んだ明倫学区の小学校は、1934(昭和9)年、講堂、体育館、78畳の格天井の大広間、作法室などを備えた3階建ての鉄筋コンクリート造の洋風建築に生まれ変わった。60年後の1993(平成5)年、生徒数の減少によって閉校となったが、住民の意向と跡地利用審議会や芸術文化振興計画などの衆知を集めて、2000(平成12)年、京都芸術センターとしてオープンした。

四条烏丸にほど近い京都の中心部に位置するセンターは、芸術活動の支援や情報の収集と発信、芸術家と市民との交流の場の提供などの活動が市民参加で活発におこなわれ、市民の人気を集め、地域の誇りを高めている。

ここでのりノベーションは、もともとの小学校のもつ建築の空間的魅力と、地域住民との結びつきの強さを、ともに継承することによって魅力的なものとなっている。改変は耐震補強やエレベーター設置など最小限にとどめられた。

この写真の撮影に訪れたUIFA会員の阿部祥子さんは「ゆったりした時間が流れていて、優雅な気分を味わった」とのこと。芸術活動に取り組む人々だけでなく、談話室や老舗の前田珈琲が運営するカフェ、そこここに置かれたベンチなど、地域の人々の心地よい居場所にもなっているようだ。



歴史ある建物と緑に彩られたアプローチが人々を誘う



建物との調和に配慮した新設エレベーター



カフェには昭和初期の雰囲気漂う

■ 新へんなかフェオープン

災害復興見守りチーム 安武 敦子

「へんなか」とは囲炉裏のことで‘囲炉裏端のように皆が集うカフェ’になるよう名付けられました。

6月20日、改修により危険度が軽減したためお披露目会を、翌日にお茶会を開き、住民の皆様にくつろいでいただきました。この建物の元の所有者は被災後長岡ニュータウンに引っ越しており、解体の話聞き、昨年、譲り受けて拠点として整備しています。建物は幕末～明治期の築、中越



ようこそ新へんなかフェへ

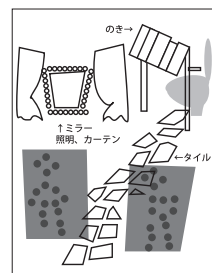
地震では大規模半壊の認定を受け未だ被災の跡が散見されます。ここは宿泊することも可能です。今は注意事項も多いため我々見守りチームの紹介が必要です。連絡をいただければできるだけ対応します。

■ UIFA JAPON ASFA 組始動

中野 晶子

「学校のトイレをARTな空間に、子ども達に豊かなSPACEを」という提言を実現させるための勉強会を発足し、総会で承認されました。皆様もご協力をよろしくお願いいたします。学校のトイレは多くの現状が、30年前の公衆便所のように殺風景で暗く臭気の解消も不安な状況で、最新の改修でも最近の百貨店のレベルと比較の対象にもなりません。

横浜市が芸術文化振興に力を注いでいるという特徴を生かして、学校のトイレにARTな空間を盛り込む道筋を探ります。手始めに、8月20～21日ZAIMで夏休み子どもアドベンチャー「ZAIMでアート探検！」に参加し「ふにゃとさかにゃのウェルカムトイレ」を構築します。子ども達とのワークショップで、築80年の洋館のトイレのなかにARTを生かした空間を短期間提示します。創造都市(クリエイティブシティ)横浜の、港と歴史のある街並みが今に生きるZAIMへ見学に来てください。又、ASFA組の活動にご協力いただける方は、ご連絡ください。お待ちしております。連絡先:the-nakanos@nifty.com(中野)



ウェルカムトイレのパーツ例(案)

■ 役員会報告

第2回5月15日：災害復興見守りチームが「復興記念第8回あぜ道茶会」を開催する旨の報告。ルーマニア大会報告書は秋に完成予定。総会運営及び記念講演会(鈴木博之氏)の準備状況確認及び手順検討。役員改選について手順等協議。次年度予算について検討。

第3回6月4日：76号ニュースレターの内容及び進捗状況について報告、発送先について検討。総会及び記念講演会について、会計、事業、役員改選等資料を確認。当日の役割分担、著書販売、活動参加の呼びかけ方法について検討。

第4回7月16日：中原暢子UIFA JAPON名誉会長(前会長)逝去。ニュースレター76号発行は8月25日を目途。総会の総括。総会議事録、今回から総会議事録署名者に議長を加え3名、署名の体裁は今までとおり。総会収支報告。震災寄付は27,500円集まり、四万省のために、CODEを通して21,100円、岩手・宮城内陸地震のためには、残り

6,400円に見守りチームの葉書売上3,600円を加え1万円を送る。9月6日海外交流の会ちらし検討。ルーマニア大会の記録。中原暢子前会長記念追悼行事を行うか検討。

■ 編集後記

新委員です。ニュースレター1号あたり飛び交うメールは300通？(在塚) 駆け出し編集委員ですがまだ駆け出してません。準備体操中ということで(飯田) 岩手で大きな地震が続いています。被災地の生活が一日も早く元に戻りますように(石川) TICADとサミット、成果が報じられましたがサブ・サハラからは落胆の声が(古村) 1000年の歴史の天神祭り。大川や川沿いの緑地が晴れの舞台に(須永) サミット、オリンピックでアジアの時代かなと思いきや、やっぱりアラブでアラブの時代なのかも？(中野) 地球が、世の中が、不安に満ちている時に「われは何をなすべきか」と問いつつ孫の笑顔に癒される好日に感謝(渡邊) 実家の銭湯の熱源はA重油、三年前は3万円台/kg、今12万円台/kgに乗りました。さて、銭湯の命運はいかに、というところで(編集長 井田)